

中央教育審議会大学分科会制度部会

——報告：認証評価制度の2年余を振り返る——

2006.6.30

財団法人 大学基準協会 柳井道夫



I. 全般的問題

認証評価機関の役割、自己点検・評価、マスメディアの対応

II. 技術的問題

年度ごとに異なる評価申請大学の数、評価者の難しさ
大学基準協会の評価の特色

III. 今後の方向性を見据えて

認証評価の目ざすもの、教育評価、評価疲れ

IV. 当面の仮のまとめとして

大学を評価するという文化の欠如



I. 全般的問題

■ 認証評価機関の役割(前提)

社会に対する大学の質保証

評価を通じての大学の改善・改革・向上

■ 自己点検・評価(突然の大騒ぎ・7年に1度の大騒ぎ)

自己点検・評価の意義の不徹底

→義務だから仕方がない(自主性・自律性の低下)

準備不足(組織、取組みの時期)

→継続的改善・改革・向上につながらない

■ マスメディアの対応

ネガティブな面のみ取り上げる(保留、勧告、問題点)

→大学も評価者も記述が消極的に(公表が前提)

長所として特記すべき事項は無視



Ⅱ. 技術的問題 1/2

- 年度ごとに異なる評価申請大学の数
基準協会の場合 H.16:34, H17:25, H.18:47
(H.8以来計:357校 平均:32.5)
- 評価者の難しさ
 - 人数の確保(大学の教育研究への造詣と実務能力
:H18年度は約600人)
 - ボランティアとして十分な時間を割くことの難しさ
 - 評価の一貫性と均一性
 - 研究の充実と評価者の能力



Ⅱ. 技術的問題 2/2

■ 大学基準協会の評価の特色

自己点検・評価の重視(自主性・自律性の尊重)

自己点検・評価報告書の字数制限なし(評価者の負担)
専門分野別評価と全学的事項評価の総合的評価

分野別評価に踏み込まずに教育評価はどこまで可能か
「完成報告書」(大学の度重なる改組＝改革)

大学に継続的な改善を求める評価

自己点検・評価報告書に将来の改善・改革・向上計画の
記述を要請

「改善報告書」の提出(会員とならない大学の評価)
達成度評価と水準評価(大学の規模別・分野別多様性)



Ⅲ. 今後の方向性を見据えて

- 認証評価の目ざすもの
 - 最低基準の確保か、世界レベルの競争か
- 教育評価
 - 学生が到達した絶対値としての成績
 - 学生がどれだけ伸びたか
- 評価疲れ(自己点検・評価、特色GP, 現代GP等々)
 - 大学、評価者、評価機関(大変な時間と労力)



IV. 当面の仮のまとめとして

- 大学を評価するという文化の欠如

終